

事件の裏を読む

盛田 常夫

物事には形式と内容、現象と本質、表と裏がある。形や表はよく見えるが、本質や裏は見えないことが多い。世の中、目に見えるものより、目に見えない物の方が、余程、世界を動かしている。目に見えるのは仮象の世界。本質を見る力があるかどうかで、世界の洞察力が決まってくる。自然科学はもちろんだが、社会を見る目も、仮象の世界から本質を掴む力にある。

腑に落ちないブッシュ演説

去る3月19日、イラク開戦1周年を迎え、ブッシュ大統領はテロにたいする戦争の新たな決意を示した。この演説の最後に、イラクで射殺された奥克彦大使に触れた。メディアは日本の貢献を賞賛するために、奥大使への言及がなされたと解説した。この演説の基調からすれば、「イラクの民主化に奔走していた日本の勇敢な外交官、奥氏はテロリストの卑劣な凶弾によって命を失った。彼の意思を受け継ぐためにも、テロリストとの勇気ある闘いを続けなければならない」と締めくくられるはずだが、彼の死について、ブッシュ大統領は 'Mr. Oku was killed when his car was ambushed' (奥氏の車が待ち伏せされたために命を失った) としか触れず、この後は彼の日記からの引用を続けている。killed は「殺された」という意味でも、「亡くなった」という意味でも使用される。「テロリストの凶弾」ではなく、「車が待ち伏せされたから」となっている。こここのところは奥歯に物が挟まったように歯切れが悪い。

「テロで倒れた日本人外交官」を称えることは、テロへの闘いに尻込みする日本を鼓舞する絶好の材料だったのではないか。にもかかわらず、ブッシュ大統領は、テロあるいはテロリストという言葉で、奥氏の死を形容していない。

奥氏の死をとくに取り上げたことに、それも「テロリストの仕業」と明言することなく触れ

たことに、何か特別の理由があったのではないだろうか。開戦1周年演説のこの部分に、腑に落ちないものを感じたのは私だけだろうか。

米軍誤射説

最近になって、奥氏らの殺害が「米軍の誤射」と見る分析があることを知った。与党の政治家の中にもこの見方を主張する人がおり、警察庁の車両鑑定でも、この見方にたいする反論が意識されている。ところが、「米軍誤射説」から見ると、事件発生以後のいろいろな事情が、より明瞭に説明できる。

まず、すべての遺留品や証拠品は米軍の手にあったのに、そのことがかなり後になって明らかにされた。とくに、米軍は車両を3ヶ月間も保管し、やっと3月初めに日本に返還した。

事件にかんする米軍の説明が二転三転し、事件の発生時刻を意識的に遅らせた形跡がある。遺留品は近辺の族長から取得したと説明されているが、事件直後に米軍がすべて押収していた形跡がある。そして、これらの証拠品が長期間、米軍に保管されたままになっていた。

そして、何よりもランドクルーザーに残された銃痕や遺体の致命傷の銃創の中に、「並行して走行した乗用車」から発射されたとは考えられない貫通痕がある。警察庁の検証は、「概ね地上1mの所から発射されたもの」として誤射説を否定しているが、「概ね」という表現は、「それで説明できないものがある」ことを認めた表現である。米軍装甲車のような車高の高い車から、それも固定の銃座からの発射を想定しなければ、説明できない事実があるようだ。それが「米軍誤射説」の有力な根拠になっている。

事件当日、ティクリットで開催される復興会議のため、米軍車両が同じ幹線道路を多数往来していたとされる。そこに、同じ会議地へ急ぐ奥氏たちの車両が、ナンバープレートを外した

まま猛スピードで米軍車両に接近し、追い越しを図ったとすればどうだろう。米軍の対応は説明するまでもない。

犯行声明のないこの事件は、灰色のまま、今、歴史の中に埋もれようとしている。仮に「米軍の誤射」だったとすればどうだろうか。アメリカが必死に隠そうとするのは当然だろう。友軍誤射は戦時につきものとはいえ、日本政府が自衛隊派遣を決める重要な時点で、これは双方の政府にとって致命的な失策になる。もちろん、真実は確実に軍の首脳に伝えられ、大統領に伝えられただろう。ブッシュ大統領が、敢えてその名を上げ功績を称えることで、せめてもの償いをしたと考えると、あの歯切れの悪い演説の意味を良く理解できる。

イラク人質事件

日本人質事件はいろいろな面で、日本社会の特殊性を見せてくれた。ベトナム戦争でも日本人カメラマンやジャーナリストが何人も命を落とした。誰一人として政府に捜索を依頼していない。家族は悲しみを外に向かって吐露することなく、逆にプロのジャーナリストとして殉死したことを誇った。そうでなければ、浮かばれない。ところが、今回のイラク事件は何かおかしい。

まず、マスメディア。政府の自衛隊派遣の是非にかかわる重大事件であることは間違いないが、あまりに騒ぎすぎ。NHKなどは、新しい情報が一つもないのに、ニュース番組の時間帯をすべて使い、くどいほど同じ内容を繰り返し報道している。テレビ・新聞が日本の家族を追いかけ回すやり方は、まるで芸能番組と同じ。もう少し冷静に対処できないか。

人質になった本人たち。最初の3名（高遠、今井、郡山の3氏）と後の2名（安田、渡辺の両名）では態度が違う。明らかに後者の両人は自らの行動に確信をもって毅然としていたが、前者の3名はいかにも自信のない態度だった。物見遊山で行ったのでないならば、どんなことがあっても毅然とした態度をとってもらいたい。泣

き言は許されない。中途半端な態度が批判を誘発している。

日本の家族。イラクに行かせたのなら、取り乱して欲しくない。アルジャジーラを通して訴えることは当を得ているが、何度も記者会見を開いたり、政党へ陳情したりするなど、無駄なことをするべきではない。マスコミの掌に乗ってしまったことが、「自己責任」合唱をひき起こした。騒いでどうなるものでもない。静かに天命を待つ以外にないではないか。それが本人たちの名誉を守ることでもあるはずだ。会見の度に涙を見せ、「帰ってきたら叱ってやる」というのは、いかにも「甘えの構造」丸出し。親も子も自立していない。

政府。「とんでもないことをしてくれた」というのが、政府首脳の腹の内だろう。それは自衛隊派遣を決めた特措法が前提する条件の欠如が露呈するからだ。渡航禁止や自己責任、費用負担などは与党政治家の本音だろうが、この言い分に悪乗りして、人質や家族を批判するのはいただけない。

よく考えて見ればよい。製造会社はアルバイト雇用なしで経営が成り立たない。各種報道機関も社員に大きなリスクをとらせる訳にはいかないから、危険地帯の報道はフリーのジャーナリストとアルバイト契約を結んだり、適宜、情報を買取ったりして、やりくりしている。大使館だって館員が直接に現地の住民に入り込めないから、現地の事情を良く知っている人々から情報収集したり、その人たちが持っている人的ネットワークを利用したりしなければ、何も仕事ができない。

もしフリーのジャーナリストやNGOの人々がイラクにいなければ、イラク情勢は欧米の報道機関の情報か、米軍や自衛隊の情報しかなくなるではないか。都合の悪い情報を流されてもらいたくない政府にとっては構わないかもしれないが、それこそ大本営発表だけになってしまい、日本社会は真の情報から隔離されてしまう。今回の事件も、米軍によるファルージャでの虐殺がなければ起こらなかった。人質批判を展開す

る前に、まず米軍のイラク占領政策の失敗を批判しなければ、片手落ちだ。

「救出」費用

「救出」にかかった費用を負担させろという声がある。何が「救出」費用を構成しているのだろうか。外務副大臣などの外務省幹部を現地に派遣した費用、外務省を含め政府が連日徹夜で情報収集にあたった人件費、現地の大使館が特別体制をとった費用、それから本人たちの移送費用、家族の上京中の費用（北海道東京事務所使用費用）か。本人の移送や家族の経費以外は、皆、政府の行政費用。人質は「救出」されたのではなく、「解放」されたのだ。アメリカ占領政策に荷担する者でないから、解放された。

そのことは2名のジャーナリストのことを考えてみれば良い。彼らの場合には、ほとんど何の「費用」もかかっていないし、外務省も現地の大使館もほとんど何もできなかった。日本中が「自己責任論」で騒いでいるから、本人たちは「お騒がせしました」と言っているが、彼らには何も謝る理由がない。3名の「救出」も、本質的にはこれと変わらない。

明らかに、3名の人質事件にかかった政府の費用は、政府が自らの政策の正当性を維持するために、政府業務の遂行として支出したものであるから、これは解放された人質やその家族が負担する筋合いのものではない。

象徴としての「人道支援」

人質を盾に取られたからといって政府の政策を変更することはできない。これはどの政府だってそうだ。そのことと、自衛隊の派遣が正当な政策であるかどうかは別問題。

そもそも、派遣された自衛隊が何をしているのだろう。あまり情報が伝わってこない。人道支援を唱えた派遣だと分かっているが、いったいどんな人道支援をしているのか、その情報が伝わってこない。本当に人道支援が本格化しているのなら、政府ももっと情報を提供すると思うのだが、何をやっているのか良く見えない。

とくに、現在のようにイラク全般の情勢が不安定になってくると、隊員は基地に閉じこもって外出は極力控えるということだから、見えないのも当然かもしれない。危険地帯だから武器を装備した自衛隊が人道支援に行くという説明だったが、基地に閉じこもってしまうのでは意味がない。現在の状況は、自衛隊派遣の前提条件が、今のイラクに存在しないことを明らかにしている。

NGOなどの小回りの効く支援と自衛隊の支援はどう違うのだろうか。小さなグループでできることと、大きな組織でできることの違いは明瞭だ。しかし、自衛隊のような大きな組織の活動は、戦争状態が完全に収束しないと効率的でないのだ。

たとえば、1000名規模の陸上自衛隊が、戦時的状況の中で人道支援をしようとするとうなるか。まず、現在の状況下では、部隊の6～7割の人員を部隊の維持のために配置しなければならない。武器・装備の配送・維持管理、基地の建設・保守、資材の調達・配備、部隊の食料調達・供給、警護部隊の維持等々、自らの組織を守るためにかなりの人員を割かなければ組織を維持できないのだ。

こう見ると、残りの人員でできる人道支援は限られていることが分かる。非常に効率が悪い。そのことが分かっているながら派遣されたのは、この派遣が象徴的意味を持っているからである。何の象徴か。イラクにたいする日本の人道支援の象徴か、それともアメリカの占領統治にたいして目に見える貢献としての象徴か。

物事には主観的判断と客観的判断がある。小泉首相がいかに人道支援を強調しようと、それは日本政府の主観的希望を表明しただけ。イラクにおける自衛隊の客観的な役割は、政府の主観的希望によって決まるのではなく、国際的諸関係の中で決まる。国際社会は、日本の自衛隊派遣がアメリカの占領統治を補完する役割を担ったものだと見ている。だから、自衛隊員が人質になれば、「解放」されることはないのだ。

スペインの新政府の決定は当然だろう。今のイラクに軍が人道支援できる環境はない。現在の軍隊はアメリカの占領統治を担うだけ。人道支援ができる環境ができるまで、軍隊を引き上げる。これはテロに屈したもので何でもない。きわめて明快な政治判断だ。

手鏡が映したもの

著名な若手経済学者が破廉恥罪で逮捕された。ネットでは若い連中が、待っていましたとばかりに「超エリートの末路」を楽しんでいる。「日本経済を覗くのではなく、スカートの中を覗いていたということですか」などと、早稲田の男子学生がしたり顔で言い放っていた。女子学生にいたっては、「気持ち悪い」と言うのが平均的な反応。それなら、芥川賞の小説は気持ち悪くないのか。あれって、今の若者の「オタク」現象を扱ったものじゃないの。「中年のおじさん」だから気持ち悪いというのは理解できるが、今の若者も、「オタク」でなければ、ただの脳天気というのも多い。人の振り見て、わが振り直せということだ。

大学の先生の中にだって「オタク」はいる。というより、「オタク」だから大学の先生になったようなもので、大学には変な人がかなりいる。大学というのはそういう所。

それより、不思議なのは、鉄道警察がどうして2時間も追跡していたかだ。繁華街で拳動が変だと、いつの間にか、警察に尾行されているのだろうか。それとも、再犯行に及ぶかもしれないと、毎日尾行していたのだろうか。どっちにしても、警察の動きの方が不気味だ。

小さな手鏡で見られるものは限られている。社会も経済も、鏡に映った現象だけを見ていたのでは分析にならない。この視点から、彼の分析力を検証するのも面白いかもしれない。ただ、この事件に限れば、弁護するつもりはないが、矮小なスリルを味わう誘惑に駆られたただけだろう。拳動不審なら、その時点で職務質問すればよいこと。それなのに、手鏡をポケットから出すまでつけ回すという方が、異常ではないだろ

うか。凶悪犯罪ならいざ知らず。鉄道警察ならもっとやるべきことがあるだろうに。とても横浜から品川まで2時間も追跡する価値のある事件とは思われない。まず、ハンガリーなら事件にならない。こんな些末なことに一生懸命になっている日本の警察の方が怖い。

とにかく日本にはどこに行っても規則が多い。さしずめ「手鏡事件」の品川駅は、「カメラ付き携帯電話・手鏡等ご利用の際は、誤解を避けるために、肩の位置より上でお使いください」とでも放送するのだろうか。日本の鉄道会社だったらありそうな話である。笑い話で済ませることが、重大事件になる日本社会は奇妙だ。

日本の社会は異常な監視社会。監視カメラがあるから監視社会なのではなく、「社会秩序」を維持するために、人が人を監視するというシステムが異常に強固に組み込まれているから。隣組のように常に互いが監視し合っている。人質家族が気にするのも、目に見えない秩序遵守の他人の目。「お上に逆らう者」が村八分に会うからだ。

東京都の教育委員会が、卒業式や入学式で、「国歌斉唱」時に起立しない先生を監視し、指示に従わない先生を漏れなくリストアップして懲罰にかける。校長や教頭を当てにできないから、教育委員会が直接に監視役を送っている。この監視役をやっている人は、どんな気持ちで仕事をしているのだろうか。北朝鮮の支配者を支える人たちと、本質は同じではないだろうか。まるで東京都教育委員会が社会主義政府のように、権力行使に及んでいる。

社会主義国家でも、国歌を歌わないから処分し解職するのは北朝鮮ぐらいだろう。東京都知事の「国家主義」志向がこういう時代錯誤を生み出していく。右であれ左であれ、国家主義の現象は同じなのだ。個人の思想・信条の自由を認めない。それが国家主義。「教育は強制」だというのが、学校は軍隊とは違う。もう少し肩の力を抜いたらどうだろうか。皆、もっと楽になるだろうに。息が詰まりそうだ。(2004年4月)
(関連記事は<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)